

981116(4-RISOKA)

## 第4章 理想化されるスポーツ：

スポーツ映像の中に見るオリンピズム

#### 4.1 緒言

1996年7月第105回IOC年次総会(アトランタ)においてオリンピック憲章 Olympic Charterが改正され、根本原則 Fundamental Principlesの中に「スポーツ実践は人間の権利である The practice of sport is a human right」(第8項)と新たに明記された(IOC, 1997)。この根本原則にはオリンピズム Olympism、オリンピック運動 Olympic Movementの定義とそれらの目標や活動といったオリンピックに関する理念の根幹が明記されていることは周知の通りである。IOCがみんなのスポーツ sport for allを自らの傘下に引き入れようとしているかどうかは別として、オリンピズムというスポーツ思想が変容しつつある好例であるといえてよからう。オリンピズムという概念が初めてこの根本原則に定義されたのが1991年版の憲章である。しかしながら、この定義によってオリンピズムという不明瞭な概念が明確に知られるところとなったかどうかは疑問視されている(マイヤー, 1996)。清水(1996)、真田(1996)、田原(1996)らによれば、オリンピズムは様々に解釈されてきており、定説はないとされている。清水が指摘するように、クーベルタン Coubertinの元々の教育的意図に立ち返ることも必要ではある(清水, 1996)。しかし、このオリンピズムという思想は、一般的には何らかの形で流布し、再生産され、一つの漠然とした意味を持ち続け、意味の変容を経ながらも今日まで伝えられてきたはずである。つまり、Coubertinがその時代的背景とともに掲げてきた理想としてのオリンピズムから、幾星霜を経て時代とともにその意味を少しずつ変えてきていると考えられるのである。それは競技スポーツ界だけにおける概念の変容ではない。スポーツ界のみならず文化の再生産システムにおいても同様な形で意味を変容させながら生きながらえてきた概念であるといえる。そのため、文化の再生産装置の一つである映画においても、このようなオリンピズムの一般に流布した意味が時代とともに表現されてきているはずである、と考えることができる。

本章は、オリンピズム概念の文献学的な検討ではなく、スポーツ映像の中で表現されているオリンピズムの諸相に焦点を当てる。オリンピズムというスポーツ思想が、スポーツ映像の中で表現されることを通して一般に流布して変容しながらも伝えられてきたその概念を解釈することによって、オリンピズムというスポーツ思想を改めて整理し直してみる。スポーツ映像の制作者達の表現意図に迫りながら、時代・社会のコンテクストに応じ、そのコンテクスト内で一般的に理解されて来たオリンピック観やオリンピズムを明らかにす

ることによって、スポーツ事象、特にオリンピック関連のスポーツ事象が理想的な方向に向かってイメージ化されていくことが確認できると思われる。

このような分析・記述・解釈によって、映像文化による暗黙のイデオロギー再生産装置としてのヘゲモニー性に配慮しながら、マス・メディアやハイテク・メディアを通じて映像として流通するスポーツ思想を明らかにすることができると思う。時代は映像時代でもある。スポーツ教材として映像文化を活用する時代でもある(Crawford, 1984; 井上, 1995; 佐原, 1997)。そのためには、スポーツ映像文化の教材化、およびその前提としてのスポーツ映像の暗黙的なイメージ化の方向について緻密な解釈が必要とされる。

本章で用いる方法は、スポーツ文化の解釈学、および記号論、象徴論、テキスト理論などの文化記号論的・文化解釈学的アプローチである。また、ここでの考察の対象はスポーツ映像の中でも、オリンピック・スポーツの映画に限定するが、それはビデオ化されたオリンピック・スポーツの映画の方が関心のある者に対して、再解釈・追解釈・反解釈などを可能にするという、研究上の容易性によるものである。確かに、オリンピック競技大会のテレビ映像の場合でもビデオに映像を記録し、象徴的意味の解釈を進めることはできる(例えば、舩本, 1989 参照)。しかしながらその記録映像は誰もが同一のものを入手できる類のものではない。一期一会の視聴として、人によっては記録できない場合もあるため、オリンピック競技大会を記録して多くの人に再解釈してもらうには、テレビ映像はアクセスが容易な媒体であるとはいえないのである。

## 4.2 オリンピック映画等に関する先行研究

本節では、第1章 1.2.5 で既にオリンピック映像の先行研究が批判的に検討されているため、その概要をまとめておくことにする。

### 4.2.1 オリンピック映画史

Downing(1995)によれば、近代オリンピック競技大会は最初の数回までは映画から無視されていた。最初に映像化されたのは1908年のロンドン大会のニュース映画である。1912年のストックホルム大会でようやくニュースではなく映画として制作された。しかしながら、それは平凡なものであり、映画的には成果のないものであったとされる。Coubertinも映画に関心を抱いていたが、それはスポーツ技術向上のための映画であった

(Espagnac, 1995)。

1924年シャモニーの第1回冬季大会および第8回パリ大会でようやく長編映画が制作された。この映画によってオリンピック競技大会の精神が初めて映し出された。しかし、本格的な芸術的オリンピック映画は1936年第11回ベルリン大会の記録映画、『オリンピア Olympia, 1938』まで待たなくてはならなかった。この初のオリンピック公式記録映画によって、何百万もの人々にオリンピック競技大会の様子を知らしめることになった。これは、オリンピック運動の推進に寄与したが、ナチスやヒトラーのプロパガンダとしての側面も兼ね備えていた。このように、功罪は別にして、オリンピック・スポーツと映画との結びつきが徐々に強められていった。

今日のテレビ・スポーツ映像の発展と力には目を見張るものがある。しかし、『東京オリンピック』(市川崑監督, 1965)のようなすばらしいドキュメンタリー映画が制作されている。テレビによるオリンピック報道の映像権がIOCによって管理されるだけでなく、オリンピック競技大会の公式記録映画として競技の様子や選手達の姿が記録され続けている。さらに、オリンピック選手やオリンピックに向けた選手達の努力の軌跡が、オリンピック関連のスポーツ劇映画としても制作されている。ここには、その時代に流布しているオリンピズムという思想やスポーツの価値観に裏打ちされた制作者達の意図が反映されている。

#### 4.2.2 オリンピック映画関連の映画批評・映像研究

オリンピック映画というジャンル分けで映画評論を展開したものは数少ない。スポーツ文学研究誌"Arete"- "Aethlon"でも、オリンピック映画をまとめてレビューしたものはないし、オリンピズムなどには言及したものがほとんどない状況にある(Umphlett, 1984)。

Zucker and Babich(1987)はオリンピック・スポーツを描いている映画は少ないが確実に増えてきているという。また、オリンピック競技大会が伝記映画の基盤となっているし、時代や社会の流行が映画作品に影響を及ぼしてきたと指摘している。しかし、オリンピズム関連への言及は見られない。

Bergan (1982)はオリンピック・スポーツ映画をいち早く紹介した映画批評家である。彼は2本のIOC公式記録映画の名作を含め、オリンピック・スポーツ作品を評論している。1924年パリ・オリンピック大会を主要舞台とした『炎のランナー』という映画に関する先行研究は多くのものが見受けられるが(舛本, 1992a; Masumoto, 1994a; 舛本, 1995; 杉

本, 1995)、残念ながらオリimpiズムに言及した先行研究はほとんどない状況にある。

第1章で指摘したように、オリimpiックの公式記録映画やオリimpiックに関する劇映画に対する映画批評や研究では、オリimpiズムというスポーツ思想に対して明確な言及が避けられている。スポーツ思想の一つであるオリimpiズムは、時代の変化とともにスポーツ映像の中に映し出されるその様相も変化してきていると推察される。しかしながら、映像の中のオリimpiズムはスポーツ学研究ではこれまで何故か看過されてきたことが明らかであった。

### 4.3 研究の方法・対象

#### 4.3.1 研究の方法と解釈のフレーム・ワーク

ここでは、第2章の方法論的検討において提示されたスポーツ解釈学の定式、つまり「スポーツ実践者の行為によって描かれたプレイテキストをコンテキストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈すること」(舛本, 1988)という方法的立場を援用し、オリimpiックが関わっているスポーツ映像を解釈する。つまり、テキストを映画の中の文字やせりふなどの言語的なものに限定せず、映像の中の仕草、身振り、行動、あるいは映像のシークエンスをもテキストと見なすこと、それらのテキストのコンテキスト(文脈)をメッセージのコンテキストに限定しないで、制作の時代状況や描かれている時代・社会状況もコンテキストと見なすこと、さらに、テキスト自体へのテキストとしてのメタ・テキストの次元まで射程に入れて分析・記述・解釈を進めるという姿勢を取ることが本章で採用しようとする方法である。

テキストとしては、スポーツ映像の中で表現されている多様なオリimpiズム関連の表現を、例えば、若者教育、国際理解、国際交流、平和の祭典競技、儀礼と祭典、シンボルとセレモニー、モットーや金言などに着目して抽出することである。コンテキストとしては、スポーツ映像に表現されている文脈だけでなく、各映像が制作された時代状況や制作技術状況、あるいはスポーツ技術状況にも着目して読み込むということになる。メタ・テキストとは、テキストについてのテキストということであるため、映像のフレーム・ワーク全体に関するテキストへの注解もメタ・テキストということになる。そのためメタ・テキストはこの場合、オリimpiック関連映画の解釈のフレーム・ワークに密接に関わるものとなる。例えば、『オリンピア』や『東京オリimpiック』の場合にはIOCの公式記録映画と

いうコンテキストから、次のようなメタ・テキストが生起する。「これはオリンピックの公式ドキュメンタリー映画＝記録映画である」と。そのことによって「この中に描かれていること(テキスト)は事実に違いない」という認識の枠組みが形成される。あるいは『炎のランナー』の場合には、「これは実話に基づいた劇映画である」と。そのことによって「この中に描かれていること(テキスト)は事実に基づいているから、本当かもしれない」という認識の枠組みの形成が見られるかもしれない。また、スポーツの劇映画の場合には、「これは劇映画である」と。このことによって、「この中に描かれてること(テキスト)は創作＝フィクションに違いないから、うまく出来過ぎた話であり、信じるに値しない」という認識の態勢が形成されるかもしれない。これらが、一般的なオリンピック・スポーツ映画の観賞者サイドの認識のフレーム・ワークであるといえる(注2)。

また、一方で制作サイドのフレーム・ワークもこのようなメタ・テキストに着目することによって顕現化される。たとえば、オリンピックの記録映画の場合には「平和の祭典であるためにそのシーンを盛り込まなくてはならない」とか「人間的真摯性＝普遍的人間性を映し出さなくてはならない」、あるいは「民族、性、年齢に関係のない平等な世界こそ映し出さねばならない」という既成の一般的に流布したオリンピズム観によって制作上の認識の枠組みが補強され強化されるかもしれない。このようにして、映像のテキスト化が進められることになっていることに配慮しなくてはならない。そのような制作者サイドの地平まで考慮して映像解釈が深化されなくてはならないと考える。

さらに重要となることは、スポーツ映像という表現形式における解釈の枠組みは、一般に流布したオリンピズム観が再生産されていくというヘゲモニー的な機能を有していることにも配慮されなければならない。ファネルが指摘しているように、オリンピック競技大会を世界中にテレビ放映することによるイデオロギーの再生産という事態に着目する必要がある(トムリンソン・ファネル, 1984, p.52)。そうすると、オリンピズムという大きな理想(それは一つの大きなイデオロギーである)が流布されていくその構造と、そのような特定のオリンピズムというスポーツの主義、主張(イデオロギー)が暗黙の内に再生産されていく構造にも注意を払わなくてはならない。それはメタ・テキストへの配慮から明らかにされると思われる。

#### 4.3.2 研究の対象とその限定

今回の分析・記述・解釈に当たって、対象としたオリンピック・スポーツ関連映像は記

録映画 3本(1)－(3)とオリンピックに向けて走ることを中心としたスポーツ劇映画 4本(4)－(7)の合計7本である。夏季大会の2本の記録映画は世界的に評価の高いものである。冬季記録映画はもともと数が少ないが、中でもカメラ技法の評価が高い作品を本研究では選んだ。オリンピック関連の劇映画としては、政治的、経済的、社会現象的に大きな問題を抱えた時代の作品、またはその時代を時代背景として映し出す作品を選定した。つまり、制作または表現のコンテクストとして問題を明確に提示した作品に焦点を当てるように試みた。具体的には、1980年および1984年の両オリンピック競技大会が東西冷戦という政治に利用され、ボイコット合戦が続いた時代の作品、1976年以後の経済的に破綻した時代のオリンピック競技大会の時代、勝利至上主義や商業主義の蔓延によるドーピング事件が勃発した時代の作品、大衆の健康志向を反映したジョギング・ブーム時代の走る作品群を解釈することに限定した。

以下用いた映画の『作品名』(公開年)〈表現年とオリンピック競技大会名〉を示しておく(注3)。

- (1) 『民族の祭典(総集編) Olympia』(1938)〈1936 Berlin Games〉
- (2) 『東京オリンピック Tokyo Olympiad』(1965)〈1964 Tokyo Games〉
- (3) 『白い恋人達 13 Jour en France』(1968)〈1968 Grenoble Winter Games〉
- (4) 『炎のランナー Chariots of Fire』(1981)〈1924 Paris Game〉
- (5) 『マイ・ライバル Personal Best』(1982)〈1980 Moscow Games〉
- (6) 『ロンリー・ウェイ Running Brave』(1983)〈1964 Tokyo Games〉
- (7) 『フィニッシュ・ライン Finnish Line』(1989)〈1984 Los Angels Games〉

#### 4.4 テクスト化およびコンテクストの確認：映像の中のオリンピズムの試行的解釈

##### 4.4.1 テクスト化およびコンテクストの確認

以上の研究対象として選択したスポーツ映像に対してテキスト解釈を進めていきたい。特にオリンピズム関連のメッセージが表現されていると思われる表現形式に着目する形で解釈を進めていく。ただし、ここで依拠したオリンピズムという概念はIOC憲章の定義(International Olympic Committee, 1997)およびオリンピズム研究者ら(Segrave, 1988; Loland, 1995; Grupe, 1997; 田原, 1996)の論調から判断して、以下の6点の側面をオリンピズム表現の判断基準とした。(1)若者のスポーツを通じた教育、(2)個人的達成的価値、(3)フェア

プレーなどの倫理的価値、(4) 平和な社会の希求、(5) 平和の祭典としての儀礼性や宗教性、および(6) 五大陸や多様な民族性などの国際性、という 6 点である。コンテキスト確認のために、池井(1992)によるオリンピック年表とトムリンソン・ファネル(1984)によるオリンピック批判の書を参照した。以下 7 編の映像におけるオリンピズム表現のテキスト化とコンテキスト確認に移る。

#### 4.4.1-(1) 『民族の祭典 Olympia, ドイツ, 1938』

オープニング・タイトル(IOC の公式記録映画/オリンピックの復興者クーベルタンに捧げる/全世界の若者の栄光と名誉のために); 五輪のマークや五輪旗、競技場バックスタンドの五輪マーク、聖火採火と聖火リレーおよび点火儀式、オリンピックの鐘(五輪マークと鷲= Nazis のシンボル)、開会式のセレモニー、万国の国旗、表彰式、閉会式。

制作のコンテキストとしては、第 2 次世界大戦前夜の Nazis の台頭とベルリン・オリンピック競技大会ボイコット運動、ヒトラーを中心とした Nazis の党大会のプロパガンダ映画の作成、映像技術の画期的な開発、初めての聖火リレーの実施が挙げられる。

#### 4.4.1-(2) 『東京オリンピック Tokyo Olympiad, 日本, 1965』

オープニングとエンディングのスーパー・インポーズ(オリンピックは人類の持っている夢のあらわれである。/夜、聖火は太陽へ帰った。人類は 4 年ごとに夢を見る。この創られた平和を夢で終わらせていいのであろうか。); 太陽のアップ; 開会式のセレモニー; 閉会式の選手団のカオス的行進; 観客・審判・選手・役員・来賓など参加者全員のショット; 広島平和公園の聖火リレー。

制作のコンテキストとして、アジア初のオリンピック競技大会、台湾問題、東京および日本の国威発揚体制と都市整備、「芸術か記録か論争」、テレビの衛星放送による全世界生中継などが挙げられる。

#### 4.4.1-(3) 『白い恋人達 13 Jour en France, フランス, 1968』

聖火リレーと点火; 開会式セレモニー; 五輪旗; オリンピック賛歌; ゴール後の勝者の歓喜と仲間の抱擁; 交流パーティー; 街頭の芸人による歓迎; クラシックバレエの練習の芸術とスポーツの身体訓練。

制作のコンテキストとして、オリンピック初めてのドーピング検査の実施、ダウンヒル



・レースのカメラマンの滑走による移動撮影、冬季初のテレビ放映が挙げられる。

#### 4.4.1-(4) 『炎のランナー Chariots of Fire, イギリス, 1981』

開会式のスタジアムの看板 *citius, altius, fortius* (1924年からモットーとして制定された) ; 五輪旗のはためき (1920年より) ; 開会式セレモニー (入場行進 / 五輪旗 / 万国旗 / オリンピック賛歌) ; 勝者の歓喜と仲間の祝福 ; 交流パーティ ; エリックのレース前の握手と勝利後の騎馬による祝福。

制作のコンテキストとしては、1970年代のジョギングブームの影響による走る映画の登場、1980年のモスクワオリンピック競技大会西側諸国66カ国のボイコット事件、1982年イギリスのフォークランド紛争、が挙げられる。表現されているコンテキストは1924年パリ・オリンピック競技大会。アマチュアリズムに厳しいケンブリッジ大学首脳、英仏のスポーツ界対立、イングランド・スコットランド対抗戦、プロテスタント主義の戒律が厳しい時代、などである。

#### 4.4.1-(5) 『マイ・ライバル Personal Best, アメリカ, 1982』

スポーツを通しての若者の成長 (自己成長・コーチからの自立) ; ホモセクシャルな関係から真の友情へ・挫折した時の励まし ; できることはする、それが生きるということ ; 勝つことよりも昨日の自分に勝つこと = 自分との闘い (自己のベストを尽くす = 原題 : *Personal Best* の原意味) ; クーベルタンの箴言「オリンピックで重要なことは勝つことよりも参加すること、人生においても大切なことは成功することよりも努力すること、征服するよりよく戦ったということ」を類推させる ; モスクワ大会ボイコット = エンディングのアナウンサーのナレーションが反語的にスポーツでの平和の難しさを伝える。

制作のコンテキストとしては、1970年代のジョギングブームの影響による走る映画の登場、1980年モスクワオリンピック競技大会の西側諸国のボイコット事件、1984年ロサンゼルス・オリンピック競技大会前、が挙げられる。表現されているコンテキストは、1980年モスクワ・オリンピックのための女子5種競技の全米予選に向けた選手達の努力の過程である。

#### 4.4.1-(6) 『ロンリー・ウェイ Running Brave, アメリカ, 1983』

部族のために走る ; イエローホースとレース前後の健闘をたたえ合って握手 ; 東京大会

の開会式(市川崑監督の『東京オリンピック』の引用)；走行妨害されても不屈の闘志でもって走り奇跡の逆転劇；表彰台での健闘の握手；コーチのイーストン氏との和解。

制作のコンテキストとしては、1976年モントリオール・オリンピック競技大会の10億ドルの大赤字、1980年モスクワオリンピック競技大会の西側諸国のボイコット事件、1984年ロサンゼルス・オリンピック競技大会前の状況、1970年代以降のジョギング・ブームの影響による走る映画の隆盛、が挙げられる。表現されているコンテキストは、1964年東京オリンピック競技大会である。ネイティブ・アメリカンの人達が居留地に閉じこめられている時代のあからさまな人種差別時代が映し出されている。

#### 4.4.1-(7) 『フィニッシュ・ライン Finnish Line, アメリカ, 1989』

薬物に手を出す前の主人公の寮の部屋にかかる白色の五輪マーク(この五輪は何色にも染まる白色である。この劇映画では主人公はドーピングに染まり、黒色になるのであろうか)；友人ティトのアドバイスや文献の提供という友情；anti-Olympismとしてのスポーツ医学者の発言の反語的メッセージ(「ドーピングもスポーツの一部だ。人間の可能性を拡げる」)；レース後のドーピング検査の様子；事故後の友人ティトの見舞い；薬物使用で死亡する主人公の反語的メッセージ；友人ティトがロサンゼルス・オリンピック競技大会の全米最終予選で優勝した後のインタビュー(「亡くなった友人グレンのために走った」と)。

制作のコンテキストとしては、商業五輪の一層の進行、勝利至上主義社会のオリンピック世界、テレビ中心主義の弊害、1988年ソウル・オリンピック競技大会のベン・ジョンソン選手のドーピング事件が挙げられる。表現されているコンテキストは、1984年ロサンゼルス・オリンピック競技大会前の男子400m全米最終予選に向けた営みである。薬物乱用の社会状況、勝利至上主義社会も映し出される。

以上の作品群が置かれているコンテキストによって、IOCのオリンピック公式記録映画も含め、政治的な問題、財政的問題、社会的問題を逃れられない状況にあることを確認することができる。古代オリンピアの祭典競技に倣って、オリンピック休戦(エケケイリア, Olympic Truce)を理想として掲げても、近代オリンピックは一度たりともその理想を実現することができなかった。ここで取り上げたオリンピック関連の映画では東西の冷戦構造をまともに受けた状況設定にならざるを得ない。また英国に関してはフォークランド紛争

に見せたサッチャー政権の強硬姿勢によって、かつての大英帝国の栄光を呼び戻そうとするかのような状況にあったことも確認しておく必要がある。経済的には、1976年のモントリオール大会を好例として、オリンピックは赤字になり採算がとれず、デンバーのように開催予定都市を住民投票によって返上する事態にまでなっていたことが挙げられる。これは来る1984年のロサンゼルス大会の商業五輪の布石となってしまったのである。ロサンゼルス大会では、企業からのスポンサーシップとテレビ放映権料、および聖火リレーまで売りに出す商業主義が徹底されていくのである。社会的には、勝利至上主義の蔓延、勝たなければ意味がないし試合から干される事態が存在している。オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く *citius, altius, fortius*」は、いわば近代産業社会の発展向上のための論理である。この向上主義がスポーツ界にもドーピング禍のような様々な問題をもたらした一つの要因である。

このような政治・経済・社会的な変質は、オリンピックの理想を再確認する動因を制作サイドにもたらしたことが推察される。オリンピック・スポーツの本来のあり方は一体何か、オリンピック・ムーブメントは一体どうあるべきか。このようなことをオリンピック映像を観るものに再考させるメッセージが制作サイドから投げかけられていると解釈することも無理ではないと考える。

#### 4.4.2 メタ・テキストへの配慮

メタ・テキストとして、映画の解釈フレーム・ワークに関して配慮することの必要性は前述した通りである。オリンピック・ドキュメンタリー映画の場合、『オリンピア』や『東京オリンピック』のようにIOCの公式記録映画というコンテキストから、次のようなメタ・テキストが生起する。「これはオリンピックの公式記録映画である」。そのことによって「この中に描かれていることは事実には違いない」という観る側および解釈する側の認識の枠組みが形成される。ドキュメンタリー映画を観る場合の認識の枠組みがこのようにして強化される。また、一方で制作サイドのフレーム・ワークもメタ・テキストに着目することによって顕現化される。オリンピックの記録映画の場合には「平和の祭典であるため、そのようなシーンを盛り込まなくてはならない」あるいは「人間的真摯性＝普遍的人間性を映し出さなくてはならない」「民族、性、年齢に関係のない平等な世界こそ映し出さねばならない」といったオリンピズム観によって制作上の認識の枠組みが補強や強化されるかもしれない。しかしながら、すでに見たように『オリンピア』ではやらせや後

撮りが多用されていたし(舛本 1992b; Masumoto, 1994b)、『東京オリンピック』でも市川監督が別撮りを活用していて、全ての映像が真実を映し出してはいないのである(Masumoto, 1996; 舛本,1997)。この事実からして、一般に流布したオリンピズム観に支配されて制作者達が映像を構成し、撮影し、編集していることが窺い知れる。そうして、当初から想定されたオリンピズム観が映像を通して流布されていくのである。

オリンピック関連の劇映画の場合には、実話に基づいた場合と全くのフィクションの場合の2通りのメタ・テキストが考えられる。例えば、実話に基づくとされる『炎のランナー』の場合には、「これは実話に基づいた劇映画である」というメタ・テキストが存在する。そのことによって「この中に描かれていること(テキスト)は事実に基づいているから、本当かもしれない」という認識の枠組みが形成されるかもしれない。どこまでが本当でどこまでが創作なのかは観客には容易には判断できない。しかしながら、実在の2人のランナー達の信念に基づいた生き様は個人的完成のレベルのオリンピズムとして観客達に看取されやすい枠組みを備えているのである。一方、スポーツの劇映画の場合には、「これは劇映画である」というフレーム・ワークに関するメッセージが存在する。このことによって、「この中に描かれてること(テキスト)は創作=フィクションに違いないから、うまく出来過ぎた話であり、信じるに値しない」というメタ・メッセージが生起する。こうしてスポーツ劇映画に対する認識の態勢が形成されることになるのかもしれない。『ロンリー・ウェイ』の場合には民族主義のために走ったかどうかは創作のため疑わしいと認識されるかも知れない。『マイ・ライバル』の場合も自分のベストを尽くすことを理想とするオリンピズムも疑われるかも知れない。同様に『フィニッシュ・ライン』(Nicolella, John 監督, 1989)では友情やフェアネスなどの倫理的な次元のオリンピズムなど子供だましの理想として疑われるかも知れない。しかしながら、これらのオリンピックに関する劇映画ではMacAloon(1984)が指摘したように、反語的に「オリンピックとは一体何か?」「スポーツとは一体何のために行うのか?」といった反省的思考のきっかけを与えてくれることになる(p.262)。いわゆるフレーム崩しである。このことによって一層オリンピズムへの認識が強化されることになる。

#### 4.5. 論議

##### 4.5.1 オリンピズムとは

オリंपイズムの概念に関しては、様々な意見が表明されている。マイヤー(1996)のいうように 40 もの定義があるとするならば、なかなか收拾がつかない。ここではオリंपイズムの定義をしている研究をごく簡単にレビューしておくことにする。

田原(1996)は元 IOA 会長シミチェックのオリंपイズム論に含まれる六つの価値、すなわち、(1)教育的価値、(2)平和的価値、(3)達成価値、(4)倫理的価値、(5)美的価値、(6)宗教的価値というものを紹介している。Hargreves(1992)はオリंपック競技大会の意味は幾つかの主要な記号表現、シンボルや儀礼によってコード化 encode されているという。クーベルタンの宗教的儀式と美的感覚、金メダル授与と国旗掲揚、開会式のナショナリズム、表彰式、聖火リレーと点火儀礼、国家主義と国際主義のバランス＝五輪旗の五つの輪、オリंपック賛歌がそれである。Segrave(1988)はオリंपイズムの定義として 1985 年に開催された Olympic Academy of Canada の論議が 1991 年の IOC オリंपック憲章の改訂と定義に影響しているとし、オリंपイズムの理念を七つの熱望(Aspirations of Olympism)として整理している。(1)教育のため(for education)、(2)国際理解(for international understanding)、(3)平等な機会(for equal opportunity)、(4)公正で平等な競技(for fair and equal competition)、(5)文化の表現(for cultural expression)、(6)スポーツの独立(政治的介入の切り離し)(for independence of sport)、(7)卓越(for excellence)という七つの願望である。Loland(1995)は、(1)個人の教化、(2)教育による社会改革、(3)国際理解と平和の推進、および、(4)聖なる”筋肉のヒューマニズム”としてのオリंपイズムという四つのオリंपイズムのゴールを示している。Grupe(1997)はオリंपック教育の目標を 5 点示している。(1)心身の調和的発達、(2)自己完成、(3)アマチュアリズムの理想、(4)道徳的原理、および、(5)スポーツによる平和の理想の 5 点である。

このように、様々な研究者によってオリंपイズム観が整理されている。この他にも Coubertin 自身の考えやオリंपイズム批判まで視野に入れば相当量の研究が見られる(舩本, 1998a)。

#### 4.5.2 映画の中で表現されたオリंपイズムの多元性

以上のような考えをオリंपイズム研究者あるいは擁護者のオリंपイズムとすれば、一般に流布したオリंपイズム観は、例えば本研究が取り上げているような映像の中に表現されたような形で伝えられていると考えられる。これらを整理し直すと以下のようにオリंपイズムを整理できよう。これはある意味で新・オリंपイズム解釈の多元的枠組みの再構成で

あるといえる。

#### 4.5.2-(1) 個人的完成、達成のレベル＝個人主義 individualism

『炎のランナー』のエリックの信心深い神への帰依としての走り、ハロルドの反ユダヤ主義への抵抗としての走りは、別の意味で個人レベルでの競走であり自己完成への道であると考えられる。特に、『マイ・ライバル』では「自己のベストを尽くす」というメッセージが個人的完成や達成を意味している。『白い恋人達』の中の滑走前のインスペクションやコース取りのイメージ・トレーニングの描写、ダンスとスポーツの身体訓練の共通性などの表現もこの部類のオリンピズムになると解釈できる。

#### 4.5.2-(2) チームや民族の賛歌＝民族主義 ethnocentrism

『炎のランナー』の主人公達やケンブリッジ大学の仲間達はパリでチームのために走っている。それが体制的には英国のために取り込まれてしまうのであるが、チームのため、大学のために走ることが描かれている。特にこの民族のために走るという民族主義は、『ロンリー・ウェイ』によく表現されている。それは人種差別に抗して走る主題論的構造のなせる必然的結果であるかもしれない。

#### 4.5.2-(3) 国の名誉＝国家主義、愛国主義 nationalism, patriotism

これは 3 編の IOC 公式記録映画において表彰式や応援団の様子から看取できる次元のオリンピズムの表現である。『炎のランナー』でも、2 人の主人公達は結果的に英国のために走ることになってしまうのである。英国チームや選手団、皇太子、あるいは歓迎のパレードまでもがオリンピック競技大会のナショナリズム狂騒を描き出しているのである。

#### 4.5.2-(4) 国際的交流や理解、国際親善、平和＝国際主義 internationalism

この側面のオリンピズムは、『オリンピア』を除く公式記録映画では頻りに描き出されている。当然のことながら、プロパガンダ映画の側面を有する『オリンピア』でも、反ナチズムを和らげるために国際友好や親善の雰囲気描写されている。この映画でも、万国旗が映し出されるのであるが、それ以上に Nazis の鉤十字の頻りに露出が不気味である。『東京オリンピック』に描き出された、万国旗のはためき、広島平和公園の聖火リレー、開・閉会式のセレモニーなどがこの側面のオリンピズムを描き出しているといえる。

#### 4.5.2-(5) 普遍的人間性＝普遍的人間主義 universal humanism = 超国家主義 transnationalism

この次元のオリンピズムの表現は、『オリンピア』を除く IOC 公式記録映画において描き出されている。特に『東京オリンピック』では、閉会式のシーンにおいて日本選手団

長で旗手であった小野喬選手を肩車して、各国選手団がカオス的に乱入した閉会式の入場行進がこの次元のオリンピズムを象徴するといつてよい。老若男女を分け隔てすることなく、また勝者と敗者を隔てることなく、様々な人間を等しく映し出すこの『東京オリンピック』における人間描写の姿勢は、『オリンピア』が強者や勝者の美学、あるいは強者の身体の美学に偏向して描写していたことと対照的である。これは国を越えて祝祭における人間の普遍的な存在を映し出しているといえよう。その意味で、人間の尊厳、倫理観や公正・フェアネスなどすべてを包括した普遍的人間性、あるべき人間の姿を映し出していると解釈できる。これが国際親善や国際平和に通ずるオリンピズムの理想的な姿であるといつてよいと考える。

#### 4.6 伝説化と神話化＝理想化する力

さて、メタ・テキストに着目し解釈のフレーム・ワークに着目することによって一般に流布し、再生産されるオリンピズムに光を当てるのが可能になると考える。本章、第4節で抽出され確認されたテキストとしてのオリンピズムの各側面は、各映画の主題論的構造とともに、観る側の意識に沈殿していき、暗黙の内に再生産されていくという構造を有していると考えることができる。以下、その暗黙のイデオロギー再生産装置としてのオリンピック関連映画の構造に着目してみたい。

神話とは、山口昌男(1986)によれば次の三つの形を取っているとされる。(1)はじまり時の神々の物語として、一定の儀礼で語られるか、聖典に記されるかしてみだりに口にしない物語。(2) 毎日の生活の中で世俗化されて語られるか、昔話という形で語られるかする物語。(3) 時代のパラダイムとして、人間の非合理性への欲求を満たす思考の潜在的枠組みのようなもの(p.137)。このように、神話は語り継がなければ(伝承されなければ)物語として伝わらない。しかも繰り返し反復され、同じ意味を伝え、同じものとして解釈され意味が固定されなくてはならない。さらにそれが、単なる物語と違って神話とされるためには、意識の表層ではなく心の奥底に静かに沈殿して、意味の濃度を増しながらも、日常には表層に表れることなく我々の表層意識を支配するような構造を有していなくてはならない。このような構造がとられたときに、暗黙の内に再生産される神話を形作る。これが、いわゆる山口の神話および神話的思考の構成契機である。このような神話構造の端緒は、まず語り継がれることである。オリンピック関連のスポーツ映像にもこのような構

造が存在していると考えられる。もしこのような神話の構造を確認することができるならば、オリンピズムの多次的表現が伝説化され神話化され、一般的に流布しているオリンピズム観として思考や行動の潜在的な枠組みを形づくりと解釈できよう。

映画の画面に取り込まれて映し出されるもの、あるいは台詞や会話、はたまた状況説明のナレーションやアナウンサーの解説などは、テキストと見なすことができる。また、映像として取り込まれ映し出されるものは、それなりの役割や意味を付与されており、見落としてはならないものである。以下では、神話形成に向けて語り継がれる端緒としての表現を探っていききたい。

IOCの公式記録映画では、アナウンサーとナレーションが用いられ、それが語り継がれる構造を象徴していると考えられる。例えば、『オリンピア』では各国語で放送するアナウンサー達が登場する。日本語のアナウンスも聞こえる。これらは開会式の様子を伝えるシーンであるが、各競技においても各国のアナウンサーが自国の選手を中心に、競技ぶりを語り、自国に伝えてきたということが推察される。この映像の中で活躍した選手達は、自分達の偉業がこの時点で語り継がれるものとなった事を暗示されるのである。また、『東京オリンピック』では三国一郎のナレーションが大きな役割を果たしているといえる。選手達のパフォーマンスやプレーぶりは、このナレーションによって語りの構造に引き込まれ、物語られる契機となっているのである。三国一郎は映画の中の語り部であるが、映画の外にオリンピズム観が拡大していく物語化の役割の一端を担っていると言えるのである。

オリンピック関連の劇映画の場合にも、このような語り語られることによって、伝説化されていく仕掛けとしてのシーンが組み込まれていることが多い。例えば、『炎のランナー』の場合、先ずオープニングの教会に歴史的史実がスーパー・インポーズされ、実話に基づいている映画であることが伝えられる。また、オープニングとエンディングの両シークエンスともに、海岸線を走ってトレーニングするイギリス選手団の姿が映し出される。特にそこでは、選手達が走り去った後をじっと見つめる親子、あるいは祖父と孫かとも思われる人物2人が登場する。制作者達が無意味にこの2人を登場させているはずがないため、この仕掛けを読み解くことも重要である。このエンディングまでに映画で表現され伝えられてきた主人公の選手達の偉業は、新聞で英国に伝えられてきていた。今度は、映画の観客とともに、選手達の英国代表としての栄誉がこの2人の眼に焼き付けられる。そして大人が子供にきつとささやくのであろう。「ほら、あれが英国オリンピック代表選手達



だよ」「あそこに走っているのが、ハロルド・エイブラハムズ選手で、こちらがエリック・リデル選手だよ」と。こうして、世代を超えて語り継がれていく仕掛けが仕組まれているのである。また、エンディングでは「彼は勝った」というオーブリーとリンゼイの会話が葬儀の後で語られる。こうして個人の偉業 — この場合は、差別に屈せず、宗教的信念を曲げずにベストを尽くして走り、そして優勝した個人的次元のオリンピズム — が観客達にも確認され、そうして記憶にしまい込まれていくのである。

一方、『フィニッシュ・ライン』『マイ・ライバル』『ロンリー・ウェイ』の3本の作品はフィクションとしてのオリンピック劇映画である。これらに共通した語り部はテレビ中継のアナウンサーであり、テレビそのものであると考えられる。まず、『フィニッシュ・ライン』ではエンディング・シーンでタイトの優勝インタビューがテレビで流される。「ドラッグで死んだ友人グレンのために走った」と彼は力強く答える。彼は薬物にも手を出さず、友情という倫理的な価値を表現しながらオリンピズムの理想に従ってフェアに走ったというメッセージがテレビのインタビューを通して全米に流布されるのである。これは映画の観客たちの心の奥底にもしまい込まれて伝えられていく仕掛けとなっている。次に『マイ・ライバル』では自己のベストを尽くし、自分がやれることはやるというメッセージと友情による支えと励ましといった個人的レベルのオリンピズムがテレビ中継のアナウンサー達の報道とともに伝えられる。しかも、1980年モスクワ大会はアメリカによるボイコットの呼びかけのため、全米予選で優勝してもその努力が政治的妨害によって報われないという注釈までアナウンサー達によって語られる。この反語的な国際平和のオリンピズムのメッセージも語り部達によって映画の観客達に伝えられていくのであるが、これらの仕掛けは映画という映像装置の中で、テレビ装置を介した全米に向けた語りという表現構造になっているのである。また、『ロンリー・ウェイ』では人種差別に屈せず、ランニング中の妨害にも負けず、民族のためにも走ったビリー・ミルズの偉業がオリンピックのテレビのアナウンサーたちによって伝えられていくという、同様の構図がとられている。この作品では、その他に、ビリーが挫折して居留地に帰った時に、少年達が新聞の切り抜きを持っていてオリンピックに出て民族のためにがんばれと期待をかけるシーンが挿入されている。ビリーの妹も兄の偉業を新聞を切り抜いて保存している。さらに、東京オリンピックで優勝した後、町に凱旋した時には、ビリーが『ライフ誌』の表紙を飾っている仕掛けまで用意されている。これらの新聞、雑誌、テレビという表現形式による語り部と伝達装置としての仕掛けは、ランナー達の偉業を伝説化する入り口を用意しているのである。

ちなみに、東京オリンピック後に実際に『ライフ誌』の表紙を飾ったのは水泳のショランダー選手であったのであるが。

以上見てきたように、選手達の成した偉業は何らかの次元のオリimpiズムとして神話化され、人々の深層に沈殿されていくような構造が仕掛けられていると解釈することができる。Mosher(1983)は「スポーツの神話が生み出されるのはオリンピックを通してであり、その神話はオリンピックへとまた戻っていく」と述べている。こうしてオリンピックの理想や理想化されたスポーツ観が、神話として暗黙の内に形成、強化され伝えられ保存されていくという、スポーツ映像の持つイメージの循環的再生産の機能が確認できるのである。

#### 4.7 オリピック・スポーツ関連映画の解釈のフレーム・ワーク

以上、分析・記述・解釈してきたフレーム・ワークを整理して図示すると図 4-1 のようにまとめることができる。

図 4-1 理想化されるスポーツ：オリimpiズム映像解釈のフレーム・ワーク (p.167)

この図のように、一般的なオリピック・スポーツ映像の観賞者サイドの認識のフレーム・ワークが形成されるといってよい。こうして、オリピック関連の問題事象が認識され、より人間的な次元の回復が叫ばれることにも通ずると思われ。その一例として、近代オリピックの「より速く、より高く、より強く *citius, altius, fortius*」というモットーは、近代社会の業績主義、産業社会の発展向上主義が反映されたスポーツ思想であるという認識がもたらされてもいる(Grupe, 1997)。そのため、このモットーに「より人間的に *humanus*」という言葉を手新たに付け加えるべきであると言った Hans Lenk の主張(Grupe, 1997)が、これらのオリピック関連の映像が我々に伝えようとした主要メッセージの一つであるとも解釈できよう。

しかしながら、これらは競技スポーツ一般とどう違うのであろうか。特にテレビで人気の高い国際大会とはどのように違うのであろうか。このような問題が次なる研究課題として浮かび上がるのである。これはテレビ・スポーツ映像文化として新たな研究に着手しな

くてはならないことを予感させる。

#### 4.8 本章のまとめ

本章では、理想化されるスポーツ・イメージの方向性に向けてその象徴的表現が解釈された。ここでは、オリンピズム概念の文献学的な検討ではなく、スポーツ映像の中で表現されているオリンピズムの理想的映像化の諸相に焦点を当ててきた。オリンピズムというスポーツ思想が、スポーツ映像の中で表現されることを通して一般に流布し変容しながら伝えられてきたその概念を解釈することによって、オリンピズムというスポーツ思想を改めて整理し直すことを試みた。映像解釈の立場として、スポーツ映像の制作者達の表現意図に迫りながら、時代・社会のコンテクストに応じ、一般的に理解されて来たオリンピック観やオリンピズムを明らかにすることによって、オリンピック関連のスポーツ事象が理想的な方向に向かってイメージ化されていくことが確認できるという立場を採用した。

この立場に依拠し、映像文化による暗黙のイデオロギー再生産装置としてのヘゲモニー性に配慮しながら分析・記述・解釈することによって、マス・メディアやハイテク・メディアを通じて映像として流通するスポーツ思想を明らかにすることができると考えた。

本章では、スポーツ文化の解釈学、および記号論、象徴論、テキスト論などの文化記号論的・文化解釈学的アプローチを用いた。考察の対象はスポーツ映像の中でも、オリンピック競技スポーツの映像に限定した。ここでは、スポーツ解釈学のフレーム・ワーク、特に「スポーツ実践者の行為によって描かれたプレイテキストをコンテクストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈すること」というスポーツ解釈学の定式を援用し、オリンピックが関わっているスポーツ映像を解釈した。また、テキストを映画の中の文字やせりふなどの言語的なものに限定せず、映像の中の仕草、身振り、行動、あるいは映像のシークエンスをもテキストと見なして解釈を進めた。

今回の分析・記述・解釈に当たって、対象としたオリンピック・スポーツ関連映画は記録映画3本とオリンピックに向けて走ることを中心としたスポーツ劇映画4本の合計7本である。夏季大会の2本の記録映画は世界的に評価の高いものである。冬季記録映画は公開されている数が少ないが、中でもビデオ化されて誰にもアクセスしやすい作品を選んだ。オリンピック関連の劇映画としては、政治的、経済的、社会現象的に大きな問題を抱えた時代の作品、またはその時代を時代背景として映し出す作品を選定した。つまり、制作ま

たは表現のコンテクストとして問題を明確に提示した作品に焦点を当てるように試みた。具体的には、1980年および1984年のオリンピック両大会が東西冷戦という国際政治に利用され、ボイコット合戦が続いた時代を描いた作品、1976年のモントリオール大会以来の経済的に破綻した時代のオリンピック大会の作品、勝利至上主義や商業主義の蔓延によるドーピング事件が勃発した時代を描いた作品、大衆の健康志向を反映したジョギング・ブーム時代の「走る」ことを描いた作品群を解釈するために選定した。

このような作品を対象に、スポーツ映像で描かれている内容をスポーツ・イメージを理想化する方向という視点から整理してみた。そのことによって、スポーツ映像の中で表現されたオリンピズムには次のような多元性が存在することが明らかにされた。(1)個人的完成、達成のレベル＝個人主義 individualism の次元、(2)チームや民族の賛歌＝民族主義 ethnocentrism の次元、(3)国の名誉＝国家主義、愛国主義 nationalism, patriotism の次元、(4)国際的交流や理解、国際親善、平和＝国際主義 internationalism の次元、および(5)普遍的人間性＝普遍的人間主義 universal humanism ＝超国家主義 transnationalism の次元である。

また、上記のスポーツ映像には、理想化されるスポーツのイメージが伝説化され、神話化されて人々の記憶の深層に沈殿していく仕掛け＝装置が明確に見られた。つまり、これらのスポーツ映像には、テレビのアナウンサー達の語りを通じた大衆へのオリンピズムという理想の語り継ぎ、大人から子どもへのオリンピックの偉業の語り継ぎ、新聞や雑誌への偉業の固定化などの映像が取り入れられていた。このように、オリンピック・スポーツは伝説化・神話化される構造のもとに表現されていたのである。このようにして、選手達の成した偉業は理想的なスポーツ・イメージとして映像化され、何らかの次元のオリンピズムとして神話化され人々の意識の深層に沈殿されていく構造が仕組みられていると解釈することができた(注4)。

## 注

注 1. 日本におけるオリンピック関連の「スポーツ映画」批評および映像研究のまとまったものは管見では見られないといってよい。ただし、出口(1987)による事典における整理は見られる。これは4ページ半強に渡り、事典としては大きな分量を占めた扱いとなっている。出口は「スポーツ映画」の定義はもとより、内外の歴史的発展をたどり、「スポーツ映画」のジャンルの整理、手法の変化、映画の文化性と記録性に言及するなど、幅広くスポーツ映画論を展開する。しかし、事典という性格からか、残念ながら個別作品の批評は載っていない。IOCの公式記録映画やオリンピック

関連の映画の扱いも他のスポーツ映画と同等の扱いであり、オリンピズムへの言及も当然ながら見られない。

注 2. この映像解釈のフレーム・ワークは MacAloon (1984) のスペクタル理論をもとに、舛本が作成したものである。そのようなフレーム・ワークの提示の中で IOC の公式記録映画に関連したものは、舛本 (1992b) および Masumoto (1994b) を参照されたい。

注 3. 本研究においてオリンピズム映像解釈で用いたスポーツものの映画は以下のビデオ版である。

- (1) 『民族の祭典(総集編) Olympia-fest der Volker』〈1936 Berlin Games〉(1938年, ドイツ, レニ・リーフェンシュタール監督, オリムピック映画会社制作, 138分, 本邦公開1939年, 1940年, 1974年総集編再上映, CBS ソニーグループ, VHS版)
- (2) 『東京オリンピック Tokyo Olympiad』〈1964 Tokyo Games〉(1965年, 日本, 市川崑監督, 東京オリンピック映画協会制作, 上下巻170分, 東宝株式会社, VHS版)
- (3) 『白い恋人達 13 Jours en France』〈1968 Grenoble Winter Games〉(1968年, フランス, クロード・ルルーシュ監督, 109分, 日本コロムビア株式会社, VHS版)
- (4) 『炎のランナー Chariots of Fire』〈1924 Paris Game〉(1981年, イギリス, ヒュー・ハドソン監督, デビッド・ブットナム制作, 119分, 本邦公開1982年, CBS/FOX VIDEO 1991年版, VHS版)
- (5) 『マイ・ライバル Personal Best』〈1980 Moscow Games〉(1982年, アメリカ, ロバート・タウン監督・制作, 128分, ワーナー・ホーム・ビデオ, VHS版)
- (6) 『ロンリー・ウェイ Running Brave』〈1964 Tokyo Games〉(1983年, カナダ, ドナルド・エバアリット監督, アイラ・イングラッター制作, 106分, 本邦公開1984年, 東芝映像ソフト KK, VHS版)
- (7) 『フィニッシュ・ライン Finnish Line』〈1984 Los Angels Games〉(1989年, イギリス, ジョン・ニコレラ監督, スタンレー・ブルックス制作, 95分, CIC ビクター, VHS版)

注 4. 本章は 1997 年度第 48 回日本体育学会発表 (舛本, 1998b) および 1998 年第 4 回国際オリンピックシンポジウムの発表 (Masumoto, 1998) を元に執筆したものである。

## 文献 References

- Bargan, Ronald (1982) Sports in the movies. Proteus Books; New York.
- Crawford, Scott A.G.M. (1984) The celluloid athlete: Sport movies as teaching tools. JOPERD 55-8:24-27.
- Downing, T. (1995) Olympism on screen. Olympic Review 25-2:57-61.
- 出口丈人 (1987) スポーツ映画. 日本体育協会 (監) 最新スポーツ大事典. 大修館書店: 東京, pp.527-532.
- Espagnac, S. (1995) Cinema and sport: Parallel worlds. Olympic Review 25-2:44-45.
- Grupe, Ommo (1997) Olympism is not a system, it is a state of mind. Olympic Review 27-13:63-65.
- Hargreaves, John (1992) Olympism and Nationalism: Some preliminary consideration. International Review for Sociology of Sport 27-1:119-137.

- 池井優(1992)オリンピックの政治学. 丸善株式会社:東京, pp.221-224.
- 井上則子(1995)大学体育のためのビデオ教材の開発. 東京体育学研究 1995年度報告 59-62.
- International Olympic Committee(1997)Olympic Charter (Home Page version: <http://www.olympic.org>)
- Loland, Sigmond(1995)Coubertin's Ideology of Olympism from the Perspective of the History of Ideas. *Olympika* 5:49-77.
- MacAloon, John J.(1984)Olympic Games and the theory of spectacle in modern societies. In MacAloon, John J.(Ed.) Rite, drama, festival, spectacle: Rehearsals toward a theory of cultural performance. Institute for the Study of Human Issues, Inc.: Philadelphia, pp.241-280.
- 舛本直文(1988)スポーツの解釈学の可能性と限界. 体育学研究 33-2:101-110.
- 舛本直文(1989)スペクタクル理論とソウル・オリンピックの解釈学. 東京都立大学体育学研究 14:27-38.
- 舛本直文(1992a)スポーツ映像文化の解釈学覚書:『炎のランナー』を事例として. 東京都立大学体育学研究 17:17-27.
- 舛本直文・遠藤卓郎・畑 孝幸(1992b)甦る『オリンピア』:レニ・リーフェンシュタールの身体映像. 体育原理研究 23:1-15.
- Masumoto, Naofumi(1994a)An investigation of symbolic meanings in sport film: The case of "*Chariots of Fire*." The paper of 1994 Philosophic Society for the Study of Sport (PSSS) annual conference. (Unpublished paper)
- Masumoto, Naofumi(1994b)Interpretations of the filmed body: An analysis of the Japanese version of Leni Riefenstahl's *Olympia*. In Barney, R.K. and Meier, K.V.(Eds.)Critical Reflections on Olympic Ideology. Centre for Olympic Studies, The University of Western Ontario, Ontario, Canada, pp.146-158.
- 舛本直文(1995)『炎のランナー』再解釈:スポーツ映像の象徴的意味. 体育・スポーツ哲学研究 17-2:51-64.
- Masumoto, Naofumi(1996)*Tokyo Olympiad: A conflict between artistic representation and documentary film*. In Barney, R.K., Martyn, S.G., Brown, D.A., and MacDonald, G.H.(Eds.)Olympic perspectives. Centre for Olympic Studies, The University of Western Ontario, Ontario, Canada, pp.201-208.
- 舛本直文(1997)『東京オリンピック』の映像解釈:「芸術か記録か」論争からみたオリンピズム. 体育学研究 43-3:153-166.
- 舛本直文(1998a)「オリンピズム」に関する研究動向. 体育原理研究 28:45-56.
- 舛本直文(1998b)スポーツ映像の中に見るオリンピズム:その多元的表現の解釈. 体育・スポーツ哲学研究 20-1:31-47.
- Masumoto, Naofumi(1998)Texts, contexts, and meta-texts: Multidimensional interpretations of Olympism in sports films. In Barney, R.K. et al.(Eds.) Global and cultural critique: Problematizing the Olympic Games. International Centre for Olympic Studies; The University of Western Ontario, pp.155-165.
- マイヤー, K.V.(1996)オリンピックは二十一世紀のオリンピズムを救えるか. 小椋博(監)新・スポーツ文化の創造に向けて-オリンピズムを考える. ベースボール・マガジン社:東京, pp.63-68.
- Mosher, Stephen David(1983)'The white dreams of God': The mythology of sport films. *Arena review* 7-2:15-19.
- 佐原龍誌(1997)オリジナル映像でたどるスポーツの歴史-「人間の尊厳」を考える授業実践.

体育の科学 47-4:270-280.

真田 久(1996) オリンピズムの史的解釈. 日本体育学会体育原理専門分科会シンポジウム、日本体育学会第47回大会号, p.69.

Segrave, J.O. (1988) Toward a definition of Olympism. In Segrave, J.O. & Chu, D. (Eds.) *The Olympic Games in transition*. Human Kinetics Books: Champaign, Ill, pp.149-161.

清水重勇(1996) オリンピズムはなぜ要請されたのか—その歴史と現在—. 体育の科学 46-8:614-620.

杉本厚夫(1995) スポーツ文化の変容—多様化と画一化の文化秩序—. 世界思想社: 京都, pp.50-62.

田原淳子(1996) オリンピズムの現代的意義—オリンピック教育の視点から—. 日本体育学会東京支部第6回例会資料(Unpublished paper).

トムリンソン・ファネル(編著)(阿里浩平訳) *ファイブ・リング・サーカス : オリンピックの脱構築*. 柘植書房: 東京. <Tomlinson, Alan & Whannel, Garry (Eds.) (1984) *Five ring circus: Money, power and politics at the Olympic Games*. Pluto Press: London.>

Umphlett, Willy Lee(1984) *The dynamics of fiction on the aesthetics of the sport film*. *Arete* 1-2:113-121.

山口昌男(1986) *文化人類学の視覚*. 岩波書店: 東京, p.137.

Zucker, Harvey M. and Babich, Lawrence J.(1987) *Sport film: A complete references*. McFarland & Company, Inc. Publishers: Jefferson, NC, pp.283-299.

981116 (4OLYMPISMFRAME)

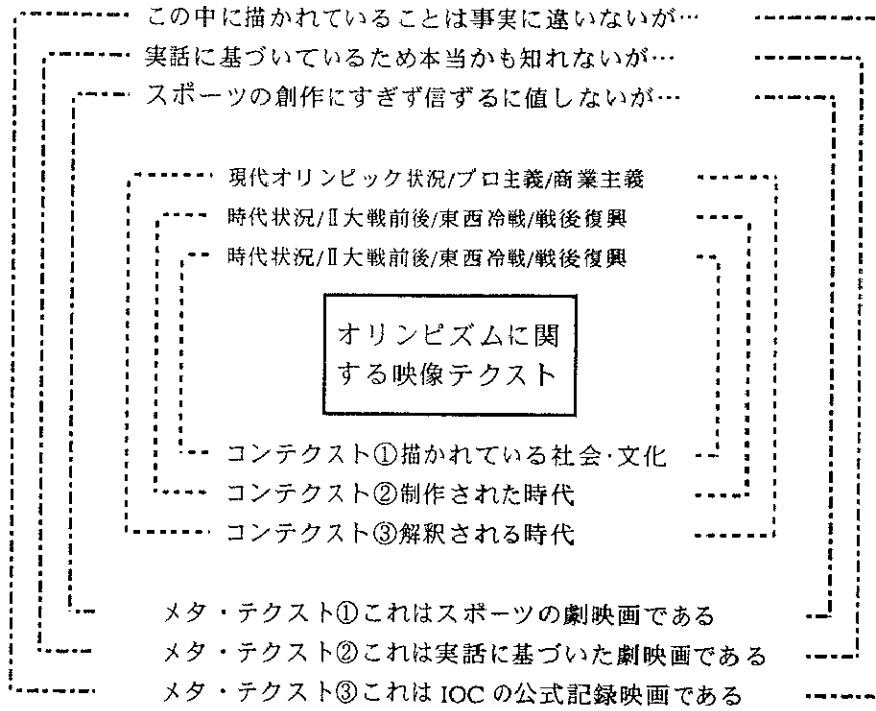


図 4-1. 理想化されるスポーツ：オリンピック映像解釈のためのフレーム・ワーク